2020年2月、クライストチャーチ市長リアン・ダルジールは、2011年2月22日に当市で発生した地震の死亡者の遺族と負傷者の方々に向け、正式な謝罪の言葉を述べた。

私は、初めてクライストチャーチ市長に選出されたとき、新市長が経験する、職務に伴う重責を感じましたが、そのプレッシャーは通常のレベルを超えるものでありました。

それは、私の場合、2011年2月22日に市の建造物が倒壊したため人々が亡くなされたり、重傷を負われたりし、被害者のご家族の多くの方々には不明な点も多数残した状態であったということを知っていたからです。

私は震災家族トラストのメンバーの方々に2014年の震災慰霊祭が始まる前に初めてお目にかかりました。 私がそこで得たメッセージは、「最愛の人や自分自身のつらい経験を他の家族が経験しなくてもよいように、教訓から学ばなければならない」というものでした。

私はこれを確実に実現するために、自分の役割の中でできることをすることを誓いました。

また私は、公式の謝罪を求めるご家族の方々が慰霊祭の場で私にアプローチされるかもしれないとの事前説明をクライストチャーチ・シティ・カウンシルから受けておりました。

私は、それは私の義務―私が市長として果たすべき義務―であると感じました。同時に、ニュージーランドと他の国では法制度に違いがあり、私自身が個人として行うと共に、クライストチャーチ・シティ・カウンシルの代表としても行う、誠実な心からの謝罪の中で、その相違点について確実に理解していただくことも必要であることを留意しておりました。

私はまた、すべてのご家族の方々が謝罪を受け入れてくださるわけではないことも承知いたしております。 私に何が言えたとしても、また何ができたとしても、あの日に起こったことを変えることはできないわけです。失われたものはどのようにしても取り戻すことはできません。

私は、日本のご家族の方々からいただいた一通のお手紙に教えを受けました。その手紙にはこうありました。「最愛の[家族]を酷い形で失ったことに私たちが意味を見出せる唯一の方法は、他の人が将来似たような状況に遭遇しても、愛する人を失う悲しみや苦痛を免れるだろうということを知ることです。」

私は謝罪文の中で、この願いに応えようとしました。そこで、ここでは、将来似たような状況が起こるリスクを最小限にとどめるために私どもが行ってきました改善点についてお話しいたします。これらの改善点は、クライストチャーチだけでなく、ニュージーランド全土においても、人々が最愛の人を失う悲しみや苦痛から免れることを目指すものであります。

カウンシルを代表しまして、まず私は、2011 年 2 月 22 日、私たちの市において、当日の惨事の結果失われた 185 の貴重な命のうつ に心を留めたいと思います。未補強の石造建築の倒壊で建物が崩れたため、あるいはポートヒルズの落石のため、最愛の人を失うという悲劇に遭われたすべての人々に心からお悔やみを申し上げます。

また、重傷を負われた方、トラウマを経験された方もいらっしゃることを心に留め、被害に遭われた方々に心からのお見舞いを申し上げます。

当日亡くなられた 185 名の方、115 名は CTV ビルの中にいらっしゃいました。 さらに 18 名が PGC ビルでも亡くなられています。 これらの建物が立っていた場所は永久保存地区になりました。木々や花々が被災者一人一人を毎日、永久に思い起こさせる保存地区の静かな雰囲気の中で、被災者の方々への思い出が生き続けます。

その日はまた、より確実に安全が保証される可能性のあった状況で、亡くなられたり重傷を負われたりした方々もいらっしゃいました。その中には、石造建築物が自分の体や乗っていた車に落下したため押しつぶされた方々も含まれます。私たちは建物のどの部分が最初に崩れるのか、どのように崩れるのかを理解することも含め、未補強の石造建築物がいかに危険であるかについて、クライストチャーチでの痛ましい教訓から学びました。

私たちは、悲劇が起こる前に地震の被害を受けやすい建物を見極め、対策を講じることの重要性を学びました。

2010 年 9 月 4 日の地震の後、建物の所有者たちが建物を安全なものにするか完全に封鎖するという措置を講じたお陰で、2011 年 2 月に命が救われたという方々もいらっしゃいます。人が亡くなったのは、公衆をそうした危険から守るための措置が講じられなかったか、講じた措置が不十分であったという場合だったのです。

ですから、ここでは市の公式謝罪として、前述の建物の一つが倒壊したため最愛の人を亡くされたご家族の方々に、そして、負傷されたりトラウマに苦しんでいらっしゃるすべての方々に謝罪の意を表させていただきます。私は市長として、またクライストチャーチ・シティ・カウンシルを代表いたしまして、謝罪させていただきます。

この事故の結果、法律に変更が見られました。未補強の石造建築物は、その一部が地震の際に人々で混み合う大通りに崩れ落ちる可能性がある場合、優先事項として取り扱われます。

地震の被害を受けやすく、他の建物より生命の安全に高い危険をもたらす建物は、当該地震リスク区域の他の危険性が高い建築物の半分の期間で査定及び補修をしなければならなくなりました。

法律はまた、カウンシルの権限を拡大するよう改正され、非常事態が解除された後も建物に関連する対策を継続して行っていくことができるようになりました。

それでは CTV ビルに話を戻します。クライストチャーチ市長として、そしてクライストチャーチ・シティ・カウンシルを代表いたしまして、CTV ビルの崩壊で亡くなられた方のご家族・ご友人の皆様、そして愛する方を亡くされたことに対し公式に謝罪いたしたいと思います。これは悲劇の中の悲劇であり、私は重ねまして心より哀悼の意を表させていただきます。

私どもは、CTV ビルで亡くなられたすべての方のご家族・ご友人の皆様に、最大の敬意を込めて謝罪を申し上げますー犠牲者の方々は、ニュージーランドの方々もいらっしゃれば、日本、中国、韓国、フィリピン、台湾そしてタイをそれぞれ故郷とするの方々もいらっしゃいました。亡くなられた方々はそれぞれ、彼らを知る人にとって、最愛の、かけがえのない人々であり、皆一人一人、実現の叶わない希望と夢を抱きながら亡くなられたのです。

また、CTV ビルの崩壊で重傷を負われた方、生存されたすべての方々及びそのご家族・ご友人の皆様にも陳謝いたします。この惨事が皆様に与えた衝撃は、皆様の人生にそれぞれ独自のかたちで影響を与えていることでしょう。

皆様への謝罪に加え、この悲劇の結果、ニュージーランドの中に変化がもたらされたことで皆様に再度ご安心していただきたいと存じます。

私が市長になるだいぶ前、あの悲劇の日に何が CTV ビルの倒壊につながったのか、ビルの欠陥を改善しておくことができたか、または悲劇の当日ビルを立ち入り禁止状態にしておくことが可能であったか、介入の可能性について全て調べ始めました。

CTV ビルは当時の地方自治体条例の下で建築許可が下りていました。地震時の建物の破損の原因について報告するために設立されたカンタベリー地震王立委員会は、その最終概要報告の中で、CTV ビルの建築許可の発行に寄与した多くの要因について論じています。 しかしながら、王立委員会では、設計のさらなる修正なしに建築許可が下りたことの理由については、明確な結論に達しませんでした。従いまして、私どもといたしましては、建物が当時予定されたままの設計で建設できたという事実に対しての謝罪しかできないのです。

現在は当時よりも広範囲にわたり権力の抑制と均衡のシステムが導入されています。 今日の技術により、建築プロセスでのエラーがどのように修正されたかを見ることができるようになりました。すべての関連項目をカウンシルが確認できる電子ファイルがありますが、その中には現在、写真も含め包括的なエンジニア記録が含まれています。そのシステムは以前よりはるかに堅牢なものとなっています。また、関連専門諸機関は、建設中、または完成後も欠陥が見つかれば、全てカウンシルに必ず報告することを義務付けました。

最初の地震が起こった 9 月以降、また「ボクシングデー」の余震があった１２月以降に起こったことに関して申し上げますならば、当時存在し現在も用いられています短時間検査モデルは、建物に掲示された通告にもありますように、詳細なエンジニアリング評価として設計されたものでは全くなかったのです。これは、当時もそうでしたが、現在も、短時間の目視による検査に過ぎないのです。建物の所有者は、「検査済。使用または入居に制限を認めず」との通告の文面にかかわらず、自らのエンジニアによる詳細な調査を実施しなければいけなかったのです。

掲示による通告は建物の所有者が詳細な構造工学評価を速やかに実施することを奨励しました。CTV ビルの場合、その後公認専門エンジニアにより検査が行われたと聞いています。

防ぐことができたかもしれない状況で何かを失った場合、その間違いから学んだ教訓により、私たちが経験したことを将来他の誰かが経験しないですむと思うと、少しは心が癒されるかもしれません。

ですから、私どもの心からの謝罪には、その日の教訓から学んだことを確実なものにしようという強い覚悟が伴っているのです。亡くなられた方々、重傷を負われたりトラウマに苦しまれている方々、また大切な方を亡くされて辛い経験をされた全ての方々に敬意を表し、こうした事故の再発を防ぐのに役立つような、さらなる権力の抑制と均衡のシステムを整備・主張し続けていきます。

事実、私たちの経験から得られた知識は、世界中で重要かつ有益なものであることに疑いの余地はありません。

最後に、この悲劇が広範囲の人々にもたらした影響を認識するとともに、この運命の日に最悪の状況の中、行動を起こしてくださったファーストレスポンダー、USAR チームその他の人々に本日心より感謝いたします。クライストチャーチは皆さんのご恩を永遠に忘れません。

この場にご参加くださりありがとうございました。それではよろしければこれから私とお茶をご一緒ください。そして一緒にお話ができればと思います。